

教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究
—カウンセリングマインドを持つ教員及びスクールカウンセラー養成のための教育システムの開発—

相 模 健 人 (愛媛大学教育学部教育心理学教室)

Acquisition of skills in the field of school counseling in Faculty of
Education.

Development of education system of fostering a sense of 'Counseling Minds' in
teachers and school counselors

Takehito SAGAMI

愛媛大学教育学部紀要

第56巻 抜刷

平成21年10月

教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究 ーカウンセリングマインドを持つ教員及び

スクールカウンセラー養成のための教育システムの開発ー

(愛媛大学教育学部教育心理学教室) 相模 健人

Acquisition of skills in the field of school counseling in Faculty of Education.

Development of education system of fostering a sense of 'Counseling Minds'
in teachers and school counselors

Takehito SAGAMI

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

1. はじめに

筆者は平成19年度より研究開発支援経費萌芽的研究「教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究ーカウンセリングマインドを持つ教員及びスクールカウンセラー養成のための教育システムの開発ー」(以下「教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究」)に取り組んできた。

現在、学校現場でははじめ、不登校といった問題がもはや慢性化し、その対応としてカウンセリング・マインドを持った教師の育成、そしてスクールカウンセラーの導入が行われ、一定の効果はあげていると言えよう。教育学部においては、カウンセリング・マインドを持った教師ならびにスクールカウンセラーとしての臨床心理士が、将来、学校現場において連携できる人材を育成するための教育システムを開発することが重要な課題と考える。

そこで「教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究」ではカウンセリング・マインドを持った教師ならびにスクールカウンセラーとしての臨床心理士を養成する教育システムを開発することを目的とし、以下の4つの研究目的を具体的に設定した。

I カウンセリング・マインドを持った教師を育成するための授業研究(以下、CM教師授業研究)において、

量的、質的な授業研究を行い、学生がカウンセリング・マインドを獲得するためのよりよい授業の在り方を研究し、提言を行う。また、フレンドシップ事業において学生が不登校などの問題を抱える子どもとの活動に対するスーパーヴィジョンに関して、その在り方を研究し、提言を行う。

II 大学院生を対象としたスクールカウンセラーを行う臨床心理士育成のためのビデオシステムを用いた教育プログラムの作成(以下、SC教育プログラム)において、カウンセラー育成に関する研究を行い、よりよいスーパーヴィジョンの在り方を提案する。

III 事例データベースを用いたカウンセリング過程の質的研究について事例逐語録をもとに研究を行い、スクールカウンセラー希望である大学院生のカウンセリング技法の習得にあたり、有益な情報提供を行う。

IV 事例データベースより事例を事例対象者のプライバシーを守る観点から改変し、学生、大学院生用の教材を作成する。

筆者はこれまでにスクールカウンセラーの経験から、スクールカウンセリングにおけるシステムズアプローチを導入した学校システムとの連携に関する研究を数多く行っている。

また、筆者は先行研究において、CM教師授業研究、SC教育プログラム、それぞれにおいて、成果をあげて

きた(相模, 2006b)⁽¹³⁾。

CM教師授業研究においては、これまで学生を対象に筆者が担当するカウンセリング・マインドを教える「教育相談論」に関する授業研究を行ってきた(相模,2003a, 2003b)^(10,11)(相模・渡部, 2004a, 2004b)^(25,26)(相模・田中・菅・河合・友寄, 2005)⁽²²⁾(相模・小嶋・松本, 2006)⁽²¹⁾。その結果、学生の意見・アイデアを取り入れて授業を行うことで、授業評価が上昇することが認められた。また授業構成も学生の反応を参考にしながら、カウンセリング・マインドが学習できるよう学生参加型の授業に変更を行っている。近年は大人数の授業のみでなく、少人数の授業を対象とした授業研究も質的研究を用いて行っている(相模, 2006a)⁽¹²⁾。KJ法を用いた学生の授業評価の結果からは、学生の細かな意見や授業の改善点について因果関係も含めた結果が得られ、授業研究のひとつの方法として用いることが可能と考える。このような授業を行うことにより、学生がカウンセリング・マインドを学習していることが伺える。

SC教育プログラムについては、実践事例を収集、保管のための事例データベースを作成した(相模・山内・池田, 2005)⁽²³⁾。これにより、さまざまな事例間での検討が可能であり、面接の中でどのような技法が多く用いられ、かつ有効であったかの検討を行えるようになった。この事例データベースをもとに、よりクライアントにとって有益なカウンセリングの実践のあり方について研究を行っている(松尾・相模・山内・矢野, 2006)⁽⁶⁾。

これまで国内、あるいは国外においてもスクールカウンセラー、またそれを行うカウンセラー、あるいは臨床心理士の養成については議論がされている途中であり、決定的なものはまだ存在しない。カウンセリング・マインドを持つ教師の養成についても同様である。「教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究」での教育プログラムの開発はこれらの議論のひとつの具体的なあり方を提示するものであり、大学教育における教育学部の役割をより強力に提示できると考える。

本稿では「教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究」における筆者の研究成果を概観しながら、目的Ⅰ、Ⅱを中心としたカウンセリング・マインドを持った教師ならびにスクールカウンセラーとしての臨床心理士を養成する教育システムについて提案を行う

ことを目的とする。

なお、この教育システムは筆者が愛媛大学教育学部において行っている授業、カリキュラムをもとにしているものであり、筆者の専門分野であるSolution-Focused Therapy (de Jong,P, Berg,I.K., 2008)⁽²⁾を活用していることをお断りしておく。筆者は学部においては教育心理学教室における唯一の臨床心理学担当教員であり、教育学部においてはほとんどの臨床心理学分野の授業を担当しており、大学院においては学校臨床心理専攻臨床心理学コース(臨床心理士第1種指定大学院)を担当する教員の一人である。

2. カウンセリング・マインドを持った教師を育成するための教育システム

Table 1は筆者が愛媛大学教育学部において担当している授業の一覧である。

Table 1 筆者が学部で担当している臨床心理学分野の授業

学年	1年	2年	3年	4年
授業	教育臨床心理学	教育相談心理検査	臨床心理学研究(4年生まで継続)	カウンセリング特別演習(通年)
実習	地域連携実習			

教育学部に入学した学生はまず教育臨床心理学の授業において、臨床心理学について学ぶことになる。この授業では「臨床心理学における基礎的な理論や治療論などを紹介し、その概略を理解するとともに、現代の子どもたちをめぐる、園や学校、家庭、地域等の問題を、臨床心理学的視点から提供することを通じて、臨床心理学の考え方や人間理解の在り方について学ぶことを目的とする」を授業の目的としており、臨床心理学について幅広く学ぶことを目的としている。

ここで臨床心理学に興味を持った学生が教育実践を希望した場合、地域連携実習における小学校での「保健室登校をしている児童との活動」に参加することができる。地域連携実習では教師を目指す学部学生が実践的な実習として小中学校に派遣され、実習を行っている。本教育学部では学部学生が行った活動報告をFIC(Friendship Information Centerの略:以下FIC)と呼ばれるWeb上の掲示板に投稿し、それを教員が掲示板で指導するという形式が取られている。

筆者はこの地域連携実習に関する研究を行っている(相模, 2007b, 投稿中)^(15,19)。

筆者は教育学部で臨床心理学を担当する教員として、小学校での「保健室登校をしている児童との活動」に数年前から参加し、FICにて学部学生の活動報告に指導(フィードバック)を行っている。この活動の目的としては教員を目指す教育学部学生が教員になったときに役立つ、不登校児童への対応を身につけることが考えられる。

筆者はこれらの活動を行うに際し、学部学生に活動報告書を書いてFICに投稿するにあたり、Solution-Focused Therapyで用いられる技法のひとつであるスケーリング・クエスチョン(Scaling Question)(de Jong,P., Berg,I.K.,2008)⁽²⁾を用いるよう指導した。その結果、スケーリング・クエスチョンを導入することにより、学生も活動を自己評価することが容易になり、次回の活動への動機づけや自信に繋がった。また、Solution-Focused Therapyの考え方を導入してフィードバックを行うことが、学生をエンパワーし、活動をより活性化したと考える。Webを用いたフィードバックの利点として、学生自身が活動について振り返る機会を持つこと、活動報告を互いに読み合い、子どもたちの情報についてWeb上で共通理解を図ることが可能、スーパーバイザーの利点として簡便に行うことができたことがあげられる。

このような活動は教員志望の学生が保健室登校児童に関わり、教室再入室を援助するものであり、カウンセリング・マインドを身につける貴重な機会といえる。またカウンセラー志望の学生にとっても、自らの資質を高める機会と考えられる。この地域連携実習は4年生の卒業まで継続可能であり、継続した学生にはより効果的であると考える。

このような地域連携実習を経験しながら2年生になった学生は教育相談論を受講することになる。この授業では「学生が現代の学校におけるいじめ、不登校などの問題の対応を教育相談の観点から学ぶ。特に子どもの問題に対して、いかに学校・家庭・地域といった学校システムが連携して対応できるか、その具体的手法について学ぶ」ことを目的としており、学生は地域連携実習での疑問や児童生徒の心理の理解や対応について学ぶことにな

る。また地域連携実習に参加していない学生もいじめ、不登校に対する対応を具体的に学ぶこととなる。

前述したように、この授業では筆者は多くの授業研究をこれまで行ってきた(相模,2003a,2003b)^(10,11)(相模・渡部,2004a,2004b)^(25,26)(相模・田中・菅・河合・友寄,2005)⁽²²⁾(相模・小嶋・松本,2006)⁽²¹⁾。

研究を続ける中で相模・吉野・田中(2007)⁽²⁴⁾では更なる観点の検討が必要な結果となったため、近年はWOWWアプローチを用いた研究を行っている(相模,2009)⁽¹⁸⁾(石丸・相模,2009)⁽⁴⁾(相模・石丸,2009)⁽²⁰⁾。WOWWアプローチはBerg,I.K.,Shilts,L.(2005)⁽¹⁾によると「クラスの教育の質に影響を与えるよう設計された革新的なプログラム」であり、教室のさまざまな改善に用いられている。WOWWアプローチが導入された中学校長が「ポジティブな強化と解決を基本とした焦点化を用いる協同作業は教育であれビジネスの場であれどんな場面でもうまくいくことでしょう」(Berg,I.K.,Shilts,L.,2005)⁽¹⁾と述べるほど、学校現場での効果は見られている。

このWOWWアプローチを大学授業に応用した授業研究を行い、量的な検討(石丸・相模,2009)⁽⁴⁾では動機が高い学生に対してWOWWアプローチを行うことで「授業理解」が高まることが分かった。また、授業中期において「授業理解」が減少しているが、これは毎回コンプリメントされることで、学生たちの授業に対する考え方が厳しくなったからだと考えられる。しかし、コンプリメントを続けていくことで、授業後期には理解度が上がってくるということが分かっている。

またKJ法を用いた質的な検討(相模,2009)⁽¹⁸⁾(相模・石丸,2009)⁽²⁰⁾では、学生に初めは戸惑いが見られるものの、観察者のコンプリメントにより、さまざまなWOWWアプローチの効果が認められ、学生の授業態度の改善に役立っていることが分かる。しかし、いくつかの改善が求められる点も挙げられる。

WOWWアプローチの実践研究は日本ではほとんどなく、これからの研究実践が求められるところであり、筆者もWOWWアプローチに関する研究を継続したいと考えている。

このような授業を受けることにより、学生はカウンセリング・マインドを持った教師を目指すことになる。

さらに教育心理学専修生の授業として、心理検査法、臨床心理学研究、カウンセリング特別演習が挙げられる。

心理検査法では「心理検査の概略、歴史、効用と限界、使用倫理を踏まえた上で、実際の心理検査を行い、実習を行う。それらの検査実習を通じて、心理検査について体験的に理解を深める。自らへの心理検査の実施を通じて、被験者側の心理について体験的に学んだり、自分について振り返る機会ともなる」ことを授業目的とし、心理検査について理解を深めることとなる。カウンセリング特別演習では「教育相談の上で必要なカウンセリング知識、技術を、ワーク、ロールプレイを通じて体験的に学習することを目的とする。なお、本演習ではソリューション・フォーカスド・アプローチを用いたカウンセリングを基本とする」ことを授業の目的とし、カウンセリング・マインドを持った教師として必要な教育相談の技法を習得し、また臨床心理士指定大学院を目指す学生にとっては基本的なカウンセリング技法を身につけることとなる。

また臨床心理学研究では指導教員と指導学生のクロードなゼミ形式の授業であり、ここから作成された卒業研究は学生の研究業績として各種紀要に投稿されている(西藤・相模, 2008)⁽²⁷⁾(毛利・相模, 2008)⁽⁸⁾。近年は大学紀要が連名であっても教員1名につき一編という制限があり、論文投稿することへの苦勞を切実に感じている。

このようなカリキュラムにより、学生がカウンセリング・マインドを持った教師を目指せるよう育成していくことになる。

3. スクールカウンセラーとしての臨床心理士を養成する教育システム

Table 2は筆者が愛媛大学教育学部において担当している授業の一覧である。筆者の所属する愛媛大学大学院学校臨床心理専攻臨床心理学コースは前述したように臨床心理士第1種指定大学院であり、スクールカウンセラーとしての臨床心理士を目指す大学院生が入学することとなる。

大学院生は筆者が担当する授業では家族心理学特論を受講することになる。この授業では「心理臨床にあたっては家族の問題、影響について考えることが不可

欠である。本講義ではシステムズアプローチを理論的基盤を置いた家族療法、ブリーフセラピーについて概観し、その中から近年、注目を集めるSolution-Focused Therapyについて学び、理解すること」を目的としており、大学院生は筆者の専門分野であるSolution-Focused Therapyについて学ぶことになる。

Table 2
筆者が大学院で担当している臨床心理学分野の授業

学年	M1	M2
授業	家族心理学特論	特別研究 (通年)
	臨床心理査定演習 I (共同)	
	課題研究 I	
実習	課題研究 II	臨床心理実習
	試行カウンセリング 心理教育相談室における相談実習	

筆者はこの授業においてもKJ法を用いた質的な授業研究を行っている(相模, 2007)⁽¹⁴⁾。この研究結果からは授業理解に役立った点、授業の改善点、授業を受けての影響について検討している。授業理解に役立った点として、「今まで解決志向アプローチの本は読んだが、そのときはとても疑問がありました」という意見が「授業形式」を経て、授業の雰囲気、教科書と相互に関係して「アプローチの理解」に結び付いていると考えられる。授業の改善点として、「授業形式の改善」、「授業内容の改善」、「授業を日本にあわせたものに」の3点について、相互に関連した改善が必要とされた。授業を受けての影響として、「今までとは違うアプローチを学んだこと」、「アプローチへの理解」、「姿勢の理解」が相互に関係しあい、「可能な範囲での利用」のように発展していることが理解でき、授業について理解が得られ、評価されていることが考えられた。

このような授業を受けることにより大学院生はSolution-Focused Therapyについて理解を深めることとなる。その他にも共同で臨床心理査定演習 I を共同で担当しており、大学院生は心理査定について実践的に理解を深めることとなる。

その上で大学院生は試行カウンセリング、相談室実習、

臨床心理学実習といった相談活動を実践することとなる。これについては筆者の相談室にビデオシステムを導入している。これによりカウンセリング技法習得においてもチームアプローチによるリアルスーパーヴィジョンを行っている。さらに筆者を含めた複数の臨床心理士のスーパーヴィジョンにより、より効果的なスーパーヴィジョンを目指している。

この手法により大学院修士生がいくつかの事例研究を発表しており（井田, 2009）⁽³⁾（河内, 2009）⁽⁵⁾（毛利, 2009）⁽⁷⁾（中上, 2009）⁽⁹⁾, 課題はあるものの、現在少しずつの成果を上げているところと言えよう。また筆者もこのようなシステムの中で行った事例を発表しており、臨床心理的知見を広めることに努めている（相模, 2008a, 2008b）^(16,17)。

また課題研究Ⅰ, Ⅱ, 特別研究といったゼミにおいても修士論文作成に力を入れている。課題研究Ⅰにおいては毎週10本の文献（内2冊は本）を読み、レビューを行うことを大学院生に課しており、文献研究に努める。それに続いて課題研究Ⅱ, 特別研究で具体的な論文作成を行い、リサーチの資質を持った臨床心理士の養成を目指している。

このようなカリキュラムにより、大学院生がスクールカウンセラーを行う臨床心理士を目指せるよう育成していくことになる。

4. まとめ

以上のようにカウンセリング・マインドを持った教師ならびにスクールカウンセラーとしての臨床心理士を養成する教育システムについて、筆者なりの提案を行ってきた。これからも授業と実践を高度に融合しながら、教育現場に役立つ教師とスクールカウンセラーを愛媛大学教育学部において養成していきたいと考えている。

引用文献

- (1) Berg, I.K., Shilts, L. 2005 Classroom Solutions: WOWW Approach. BFTC Press, WWW.BriefTherapy.org. ソリューション・ワーカーズ訳 2005 教室での解決 うまくいっていることを見つけよう! 3,8.
- (2) de Jong, P., Berg, I.K. 2007 Interviewing for

Solutions: Third Edition. Brooks/Cole Publishing Company, California. 桐田弘江他訳 2008 解決のための面接技法 [第3版] 金剛出版 114.

- (3) 井田蓉子 2009 保健室登校の中学生とその母親との母子面接 心理臨床事例研究愛媛大学心理教育相談室紀要 第5号 1-8.
- (4) 石丸雅貴・相模健人 2009 大学授業におけるWOWWアプローチ実践の試み その1 ー量的な検討ー 日本ブリーフサイコセラピー学会第19回大会抄録集 38
- (5) 河内美恵 2009 生きがいについて悩む成人男性との面接過程 心理臨床事例研究愛媛大学心理教育相談室紀要 第5号 23-31.
- (6) 松尾美耶・相模健人・矢野恵美子・山内加奈子 2006 解決志向アプローチにおける「どうやって～したのか」の技法について有益な用い方に関する研究 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集 373.
- (7) 毛利光一 2009 「よくわからない」と語る引きこもり傾向の男性との面接過程 心理臨床事例研究愛媛大学心理教育相談室紀要 第5号 89-97.
- (8) 毛利光一・相模健人 2008 大学生のアパシー傾向と親の養育態度との関連についての研究 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第55巻 第1号 47-53.
- (9) 中上真由美 2009 不登校傾向の娘をもつ母親との面接過程 心理臨床事例研究愛媛大学心理教育相談室紀要 第5号 33-40.
- (10) 相模健人 2003a 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1 ー解決志向アプローチの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第49巻 第2号 57-77.
- (11) 相模健人 2003b 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その2 ー解決志向セラピーの質問方法を用いてー 愛媛大学教育学部紀要 第Ⅰ部 教育科学 第50巻 第1号 77-84.
- (12) 相模健人 2006a KJ法を用いた質的な授業研究 ー学生の評価をもとにー 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要 第24巻 97-106.
- (13) 相模健人 2006b 教員養成学部におけるカウンセリング分野の教育システムの開発 ー自らこれまで

- の研究とこれからの研究方針について— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第53巻 第1号 57-60.
- (14) 相模健人 2007a KJ法を用いた質的な授業研究 その2 —学生の評価をもとに— 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第25巻 105-116.
- (15) 相模健人 2007b 保健室登校児童を支援する学生活動にWebを用いてスーパーヴァイズを行った事例報告 —解決志向アプローチにおけるスケーリング・クエスチョンを活用して— 日本心理臨床学会第26回大会発表抄録 181.
- (16) 相模健人 2008a 不登校の子どもたちを抱える母親に対してSolution-Focused Approachをもちいた一事例 第56回臨床心理士研修会
- (17) 相模健人 2008b 不登校生徒とその母親にSolution-Focused Therapyを用いた一事例—Needsの設定と専門機関との連携を中心に— 日本心理臨床学会第26回大会発表抄録集 180.
- (18) 相模健人 2009 大学授業におけるWOWWアプローチ実践の試み —学生の感想をもとに— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第56巻 第1号 73-84
- (19) 相模健人 (投稿中) 保健室登校児童を支援する学生活動にWebを用いてフィードバックを行った事例報告 —Solution-Focused Approachにおけるスケーリング・クエスチョンを活用して— 学校教育相談研究 (投稿中)
- (20) 相模健人・石丸雅貴 2009 大学授業におけるWOWWアプローチ実践の試み その2 —質的な検討— 日本ブリーフサイコセラピー学会第19回大会抄録集 38
- (21) 相模健人・小嶋健治・松本円 2006 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その6 —解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要 第24巻 117-126.
- (22) 相模健人・田中美紗・菅知絵美・河合美貴・友寄令子 2005 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その5 —解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第52巻 第1号 101-106.
- (23) 相模健人, 山内加奈子, 池田歩美 2005 解決志向アプローチのための事例データベース作成の試み 愛媛大学教育学部紀要 第52巻第1号 97-100.
- (24) 相模健人・吉野飛鳥・田中美紗 2007 スケーリング・クエスチョンを用いた授業研究 その1—授業評価の観点の検討— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第54巻 第1号 37-41.
- (25) 相模健人・渡部光 2004a 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その3—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第2号 83-88.
- (26) 相模健人・渡部光 2004b 学生の意見, アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その4—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第51巻 第1号 71-76.
- (27) 西藤佳奈・相模健人 2008 作文と電子メールを用いたフィードバックが及ぼす充実感の変容に関する研究 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第26巻 107-114.